

パネルディスカッション

「地域力の向上」

司 会	浅 見 泰 司	東京大学 教授
パネリスト	小 林 義 光	山梨県 都留市長
	栗 原 裕 康	静岡県 沼津市長
	速 水 雄 一	島根県 雲南市長
	加 藤 仁 美	東海大学 教授
	北 原 啓 司	弘前大学大学院 教授

○浅見 それでは、パネルディスカッションに入りたいと思います。

本日のパネルディスカッションのテーマは、「地域力の向上」です。地域力という言葉は、1990年代位からよく使われるようになってきたと思いますが、きっかけは、阪神・淡路大震災の時に、大きな被害がございまして、その時に行政の力だけではなかなかうまくいかないということで、地域の方々も自助・互助で、地域で助け合い、これが大きな力になったということで、そういった力を地域力と称して、今後、防災性能を上げていくためには、そういったことをさらに進めねばならないと、そういう議論があったと思われまます。

地域力の強化は、その後の防災対策の一つとして考えられるようになりましたが、それともう一つありますのは、地域振興の必要性です。人口が減少し、高齢化するということで、地域の活力に懸念を持っている、そういった都市の方々で、何とか地域を盛り上げたいという時に、地域力という言葉を使って地域振興の種を探そうということがあったと思います。その時に、まだ気づいていないような地域の魅力ないしは資源を発見して、蓑茂先生の話にもございましたが、資産化することが必要ではないかということで使われています。

そういった意味で考えますと、この地域力とは、一つは内なる力と言いますか、自分たち同士で何とかしていく、そういった力、さらには自分たち同士で地域を盛り立てて外に向かって発信していく、あるいは売っていくということもあると思いますが、そういったことにつながると思います。この中に、延々として受け継がれている一つの考え方は、自立性、ないしは自主性ということで、自分たちの力で何かをするということが言われていると思います。

こういった地域力をいかに向上するか、これは地域によって全然違いますので、それぞれの地域に合った形で進めるということが必要になります。

そこで、まず、皆様から地域力とはどういうものなのか、そして地域力を向上するにはどうすべきなのかということについて話していただきたいと思います。

それでは、最初に、小林市長をお願いします。よろしくお願いします。

○小林（都留市長） 地域力とは何かというお話でありますけれども、先ほどもお話をさせていただきましており、やっぱりそこにまずあるものだというふうに思います。ですから、「自然環境」、山、そして都留市の場合、海はありませんけれども、川とか水とか空気とか、そこに生きている動植物、それから「文化環境」と言われております教育とか医療とか金融とか文化、それから「インフラ環境」、道路とか橋とか鉄道とか、先ほど言いましたように、ここには地場産業も入るんだと思います。そうしたそれぞれの地域の風土に長い間育まれてきた、いわゆる個性的なもの、独自性の強いものだと思います。

ですから、宝になるし価値になるのだと思いますし、他の地域にあるから、そのものをいくら都留市へ持ってきたとしても、それは歴史の裏づけも無いし、物語もついてないものですから、結局根づかないことになってしまうんだというふうに思います。そうした長い風土から生まれた、いわゆる3つの環境というのがまずあると思います。

また、そうしたものを発掘して、再生して、磨き上げて、この後が難しいんですけども、分類をして、順序配列を変えて、組み合わせ、結びつけて、そこから新しいものをつくっていくという創造力とでも言うんでしょうか、そういうものを持った人材を有することであり、まちは当然人間がつくるわけですから、その環境と人の力が地域力なんだというふうに思います。

○浅見 どうもありがとうございました。

環境と人の力ということですね。それでは栗原市長、お願いいたします。

○栗原（沼津市長） まず、人ですよ。人間を除外すれば地域力もくそも無いわけですから、まず人。その人と人との結びつく絆、組織と言ってもいいと思いますけれども、これは市役所の職員も含めて地域力を向上するためには、まず人間、そして人間の組織、絆と、そういったものを向上していくということ。それから、当然、そのバックには自分たちの住んでいる自然環境、それから、これはもう小林市長と全く同じですけども、歴史、環境、伝統、そして教育というのがあるわけですから、そういったものを総合的に高めていくということで地域力というものが生まれてくるのではないかなというふうに思っています。

そのためには、自分たちの住んでいるところ、自分たちの歴史や伝統、そういうものを知らなければいけない。先ほどの講演にもありましたけれども、そういうことにつながっていくん

だろうと。それが進化していけばいくほど、地域力は生まれてくるだろうというふうに私は思っております。

以上です。

○浅見 ありがとうございます。

地域を知ることが、原点として重要だというお話だと思います。

それでは、速水市長、お願いいたします。

○速水（雲南市長） 今、お二方とだいたい同じことになるんですけども、私どもの雲南市では、男女共同参画社会の実現ということを目指して、キャッチフレーズを掲げております。このキャッチフレーズが、気がつくという意味での「気づいて」、「築く」はクリエイトする、「気づいて築くうんなんプラン」というそのテーマを掲げて、男女共同参画型社会の実現に向かっておりますが、しかしこれは、全てのことに言えるフレーズだというふうに思っております。

要は、自分たちが住んでいる地域、資源に気づく、その気づくための仕掛けづくりも必要でありますけれども、この気づいて、そして磨きをかけて、自分たちの地域に愛着を、誇りを持つこと、これがまず第一だと思います。そして、それを行動に結びつける、行動に移す動機づけ、組織化、そういった仕組みが必要だと思います。

そして、それは自分たちの地域、今、私の最初の話では交流センター単位という言い方をいたしました。自分たちのその地域だけでできる場所はしっかり進める。その意欲を持って、できなければ隣の地域自主組織と助け合って、いわゆる自助共助、そして、それでなおかつ行政のかかわりが必要ということであれば、行政がそこに出かけていく。そういう順序立てをしっかりと市民の誰もがそういうスキームでまちづくりを進めていくんだということ共有すること、そのことが大切ではないかな。

今の最初の話の中で、私は行政の仕事もやらせてくれという地域自主組織が出てきたというふうに言いましたけれども、当初、地域自主組織がスタートした時は、全然行政は何もやってくれないという声がぶつけられました。今はかなり、その地域自主組織が組織力として充実してきましたので、やろうと思ってもやらせてくれないというふうに言い出す組織も出てきた。大変うれしく思っておりますが、しかし、それが行政の押しつけとか行政の下請けだというふうに住民の皆様を受け取られてはいけないというふうに思っております。さっき円卓会議と言いましたけれども、その辺をよく、行政と住民とあるいは議会と同じ目線でそれらが話し合われて、納得いく形で、じゃ、やってよという格好に持っていければと思っております。そうい

った仕組みがしっかりできることが、地域力が向上することだというふうに思っております。

○浅見 ありがとうございます。

それでは、今度は加藤先生、地域力とは何か、地域力を向上するにはどうしたらいいかということも含めてお話してください。

○加藤 まず、地域力は何のために必要かということをお話ししたいと思います。これは、やはり地域で幸せに暮らすため、当たり前のことですけれども、そういうことだと思います。後ほど、たぶん東日本大震災の復興の話について、北原先生からお話があると思いますが、私は東北のある集落を訪問し、被災者のお話を伺って非常に衝撃を受けました。それは、都市計画にかかわる私たちは、便利で快適で合理的な生活が一番望ましいと、そういうふうに思って、そういう都市をつくってきたわけですけれども、その集落に暮らしている方々は、被災前は非常にのんびりと自給自足の生活の中で幸せに暮らしていたのですね。それは、隣近所との絆も含めてということです。大変衝撃を受けまして、私たちがやってきたまちづくりは一体何だったのかということを感じました。

地域力というのは、そういう意味では地域の中で幸せ感を感じられる、地域づくりを追求していく中で生まれてくる力ではないかと思っています。ですので、ただ漫然と地域に暮らしていくのではなくて、お互いに助け合いながら、あるいはまちの課題があれば自分たちで動いて解決していくとか、そんな活動とともに幸せが感じられる、それが地域力につながっていくのではないかなというふうに思っております。

じゃ、地域力はいきなり生まれるのかということ、なかなか難しい面もあると思っております。先ほど空き家とか高齢化のお話が出ましたのでちょっとご紹介いたしますけれども、東京の郊外でも非常に高齢化が進んでおりまして、計画的な戸建ての住宅地でもものすごく深刻です。それこそ、高齢化率が35%、40%の団地がありまして、そういう中で90代、80代の方の高齢者を抱えているお嫁さん世代が非常に危機感を持って家事の援助をしたり、それからお互いに空き家の管理をし合ったり、それから、自然に近所のどこそこのお宅のおじいさん、おばあさんを見守り合ったりとか、そんなことをしている地域に出会いました。そのうち、そのお嫁さん世代はNPOをつくって、小規模多機能型の施設をつくったり、センターの商店街が空き店舗になったらその中にデイサービスセンターをつくったりしています。そういう危機を感じることで、地域力というのは生まれていくのかなという気もいたします。

○浅見 どうもありがとうございます。

それでは、北原先生、お願いします。

○北原 僕は、震災復興のまちづくりとかかかわってきている中から感じている地域力という言葉についてのお話をしたいと思います。ちまたではとにかく国の政策が悪いとか言いながら、復興は遅々として進まないという言い方をしますけれども、問題は国の政策うんぬんということよりも、それを実際に動かしている地方自治体、市町村がもちろん大変な被害を受けて、脆弱、弱くなってしまっているという問題もあります。実は、自分たちで考えて、自分たちで学んで、自分たちで決断をしていくということ、ある意味で地域力と言うと思うんで、それができている、そういうふうなまちづくりをしっかりとしてきた経験があるまちが実際にあったのかというと、そこが非常に弱かったという気がしているんです。

だからこそ、急にそんなことを言われたって、つまり、地震が来る前にこのまちの10年後、20年後、あるいは自分たちの子どもたち、孫たちにどういうふうな物語を見させるかというようなことを考えるようなことをしてきたんだらうか。もちろん、行政はやってきた。ただし、市民と一緒に考えるようなことをしてきたんだらうか、地域の将来ビジョンを共通に描くというようなことを本当にしてこられたのか、してこられたところが僕は地域力があると思うんです。

でも、それが総合計画はつくってみても、そういう形でしかやってこられなかったとすれば非常に弱い。今、実際に地震を受けて、さあどうするかといった時に、迷って迷って、その時に一番つらいのが、国の方からこういうふうな施策をすれば補償金が出るという形でメニューが出てきます。本当は、このまちはこういうふうにしていきたいんだけど、今、これをやると復興の交付金があるという形で、気がついた時に、ある工場は太陽光発電をすればいいというように決断をします。そういうふうなお金が出るからです。その前に、この工場を続けて水産加工をどうしていくのかという議論が1回もされないままにツールとしてそっちがいつかしてしまう。それは、復興が早ければいいのかという話です。

さっき、雲南市の速水市長が、人口がだんだん減っていくという話を、雲南市は島根県より10年早く、全国では20年早く見えているとおっしゃっていました。逆の話をする、例えば私が入っている漁村なんかは、地震が来なくても10年後には、恐らく後継者の問題でとんでもないことになってしまうというところを、長老の方々が、「いや、俺たちが生きている間とはとにかくやらせておけ」と、「後はお前らが考えろ」と。商店街もそうです。もう目の前がどんどん疲弊してきているんですけども、「俺たちの代は何とかするから、後はお前らで考えろ」と。10年先に考えなきゃいけないことを考えてこなかったんです。いや、20年先に考えなきゃいけないことをとりあえず先延ばしにしてたんですよ。

その作業をしてこないで、いきなりこういうふうになったからどうしますかと若い人に言われても、実は学んでいません。考えてもいません。志だけです。今、一番問題になってきているのは、いくら復興の志があっても、その気持ちだけでは動かないという現実、左手に志を右手にそろばんを、とこの間ある人が言っていました。本当にそういうようなことを考えて計算して、お金のことも考えて、やっと技術的に入っていかなきゃいけない時に、まず先にとまってきてしまっている。そういう、本当に自分たちで考えて、そして場合によっては学んで、内発的にしっかりと考えていくという、そういう力を蓄えていくことが地域力だと僕は思います。

以上です。

○浅見 ありがとうございます。

小林市長からは、個性を見いだそうということで、環境とそれを実際に運営していく人が重要だというお話をいただきました。栗原市長からは、それに加えて自分たちの場というものを理解することが重要であるというお話がございました。

速水市長からは、「気づいて築く」というようなキーワードをいただきました。まさに気づくということが非常に重要である。それをさらにつくり上げていく、これが重要であるということをお話しいただきました。

加藤先生からは、地域力とは、幸せ感が感じられるようにしていくことだということをご指摘いただきました。

北原先生からは、将来を考える力をつけること、これがまさに地域力ではないかというお話がございました。

少しまとめさせていただきますと、一つは自分の地域の強みを知ることが非常に重要である。その地域の資源を生かして、それにいかに新しい個性を味つけして世に出していくか、これが重要なわけで、そういった意味での気づきについて、共通にご指摘いただいたと思います。

もう一つは、むしろ人の方ですが、市民が主体的に進める、あるいは行政も含めて主体的に考えることが重要で、その時に例えば、防災で考えますと、平時に備えを戦略的に考え、将来のことを考えていくということが重要だとお話しいただいたと思います。

地域資源を生かして個性を出す、ないしは地域資源の発掘方法ということと、市民等の平時の備え、この2つについて少し議論を深めたいというふうに思います。まずは地域資源の発掘ないしは市民の主体的参加、こういったことについて具体的な方法論も併せて議論していきたいと思います。

最初に、小林市長にこの点についてお願いできますでしょうか。

○小林（都留市長） その強みを知るといことで、私個人的には、「川は遡れ、海は渡れ」という言葉があって、「元気くん」の時もそうですが、歴史を辿ることが一つ重要で、それからもう一つはやっぱり海を渡る、外から見るということが重要なことだというふうに思います。

一つ思い出すが、私がまだ県議会議員だったころに、フランスのソーヌ・エ・ロワール県と山梨県が友好都市を結んでいて、その議員の方々を成田に迎えに行った帰りに小仏トンネルを出ましたら、ものすごくその人たちが驚いて、こんな近くに里山があるということの印象が非常に強かったらしく、我々には日常的なことですが、こういう考え方があるんだなとものすごく思いました。そんな言葉を信条に個人的にはやってきました。

先ほども言いましたように、やっぱり協働というものをする時には、ただ言葉で言っても何もならない、やっぱり制度をつくるということとムードをつくるということが重要なことだと思います。

制度としては、先ほど言いましたように、市民委員会制度というのをつくらせていただきました。これは任意の市民のグループが、私はこういうことをしたい、ああいうことをしたいというようなものを提案してもらうもので、これは、市に提案するんですけども、審査は市ではやっていません。市民活動推進委員会という民間人で組織した委員会がありまして、そこで審査をしてもらって、採択になったものは30万円を限度に助成金も出し、いろんなことをしてもらいますが、その結果としてさっきの「元気くん」が出たわけです。そのほかにも、もう11回目になりますけれども茶壺道中を復活したり、ポイ捨て条例の制定もその委員会から出たものですが、これまで22団体からいろんな提案をもらって、それがほとんど政策へつながっています。

そのほかにも、仕組みはだいたい同じなんですけれども、自治会を対象に、「特色ある自治会制度」、それから小中学校11校に対する「個性を育む学校づくり制度」、それから「地域協働のまちづくり推進制度」というものがありまして、都留市は昭和29年に7町村が合併してスタートしたんですけども、旧町村単位にそういう組織がつくってありまして、それはいわゆる地域の防災力、防犯力、教育力、文化力を上げようということをしていて、学童保育を運営していたり、子どもの見守り隊をつくっていたり、いろんなことに取り組んでいただいています。

それから、もう一つは、「ふるさと普請事業制度」をつくってありまして、これは原材料は市の方で出し、労務については市民にやってもらうということで、今まで、ターゲットボードゴルフ場ですとか、ちょっと朽ち果てたような野外劇場があったんですけども、その再生

なんかもそんなことでやってもらっています。

それから、もう一つ、ムードづくりということで、先ほど雲南市長からも出ましたけれども、男女共同の話です。実は、うちは、ムードづくりは条例づくりというのを手段にしている部分がありまして、私どもは平成12年3月に男女共同参画基本条例というのを日本で一番初めにつくりました。それは、都留市が、男女共同参画が本当に先進的に進んでいるというのではなくて、いわゆる石を投げるという意味もありました。だから、非常に論議が起きて、賛否両論がすごかったですけれども、結局そのことが市民にもものすごく大きなインパクトを与えて、山梨県の中でも男女共同についてはだいぶ進んでいる地域になっていると思います。

その後、市民活動支援条例をつくったり、平成21年には協働というものを強く位置づけた自治基本条例をつくって、そういう条例づくりで石を投げることによって、市民にそういう論議とか議論とかを巻き起こすような手法を使っている部分があります。

○浅見 議論を呼び起こすきっかけをアイデアを出してつくっているということですね。

それでは、栗原市長、お願いいたします。

○栗原（沼津市長） 先ほど、北原先生のお話で、10年、20年先のまちづくりを真剣に考えてこなかったんじゃないかと、そういうご指摘がありました。

私の経験でいくと、確かに市の総合計画というのはつくっております。形として地域の皆さんに入っていて、市民も参加したような格好になっているんですが、実はコンサルがつくったものを市の職員が適当に書いて、それを皆さんに見せて、しかも役所言葉でバンバン言いますんで、地域の皆さんはほとんど理解しないで何かわかんないけどいいかってなもんでやっちゃう。それは、強烈に私、今反省を持っております。

先ほど、私どもの地域の重須というところが津波の被害が確実に予想されますので、集団移転をしようとして今計画をしているというお話をさせていただきました。その話の際、私はお金の話ばかりしちゃいました。大変はしたないと思っておりますけれども、そのお金が一番実は大きな問題なんです。ただ、重須地区の人口は、約400人ですけれども、世帯主の皆さんのほとんどが集会に出てこられてきちっと勉強しています。

例えば、集団移転をしたいというような元々の発想は、怖いからですね、当然怖いから。だったらその先進事例を学ぼうじゃないかと、例えば奥尻島は集団移転をしたんですが、北原先生のご指摘のように、放っておいても高齢化でだめになっちゃうようなところだったんで、実際だめになっちゃったんですね。だめになっちゃったと言うのは大変失礼ですけども、それほどうまく機能しなかったというふうに聞いています。

したがって、先進事例を学ぶ。それから自分たちの住んでいる地区の歴史、文化、そういうものをきっちり学ぶ。そして、これだけは時代の変化にもかかわらずこれだけは残したいんだと。時代の変化によって、これは消えいってもやむを得ない、あるいはそういうものも、そういうこともあるだろう、けどこれだけは残したいんだと、それを残すためにはどうしたらいいんだというようなことを含めて、じゃ、30年後、20年後の我々の住んでいる地域というのは一体どうなるんだろうと、これからの人口動態とか、そういうことも含めてきちっと議論をする。それで、最終的にどうなるかということですので、たまたま津波が来るね、怖いね、逃げなきゃいけないね、けどそんなに簡単じゃないよと、もちろんお金かかりますから、けどそれによって地域の将来、自分たちの住んでいるところがどうなるんだということを真剣に考える。

これがうまくいけば、私は全市にもある程度の共通項が出てくるんじゃないかというふうに期待しています。そういうことが地域資源の発掘方法という、ちょっとまちおこしみたいな話になると思ったんで、今の私の話は少し異質ではございますけれども、せつかくの機会ですから、そういうことも申し上げたいと思っております。

○浅見 昔の行政計画だと市民参加風のものが結構ありますね。

実は、昔読んだ論文の中に社会心理学の論文がありまして、2つのグループに分けて、あることを議論して最終的に決定するんですが、片方は参加しないで傍聴だけしているんですね。片方は参加するんですけども、その人の意見は全く聞き入れないで最終的に結論をつくるんですが、実は参加した方が、最終的に自分の意見は全く入っていないのに、賛成率が高いという研究もあります。

ただ、今後は、ふりをするのではなくて、本当の自主的な参加を促して、参加の意識を高めることが重要だという感じがいたします。

それでは、速水市長、お願いいたします。

○速水（雲南市長） 雲南市の場合は、先ほどもお話ししましたように、合併して間もない市でございますので、その地域資源という宝探しにつきましては、雲南市がスタートする前から、これもさっきのお話の中で言ったんですけども、自分たちの地域にはどんなものがあるだろうかということを、合併協議会に参加していただいていたその市民の代表の方、住民の代表の方に、その方々が合併して新しく誕生した市となれば、何を売りにしたらいいんだろうかということで、随分と協議をいただきました。その協議の中から、これもさっきお話しした5つの「幸せ」について考え出していただきました。

だいたいそういったものが出たところで、6つの町からなる雲南市でございますが、合併前

から例えば私どもの地域は銅鐸が出たところとか、銅鏡が出たところとか、あるいは銅剣が出たところとか、日本で初めてのお宮があるところとかいう地域でありますので、ずいぶんと大変ありがたい話ですが、東京在住の自称雲南地域応援団という方々が本当にたくさんいてくださって、せっかくそうしたエールを送ってくださる方々がおられるんだから、自分たちでこうして洗い出したさまざまな恵み、宝をどうやって生かしたらいいかということ協議する時に参加していただいたんですね、そのワーキンググループに。それも1回や2回じゃなくて、合併後の雲南市が誕生するまで、そしてまた誕生した後も積極的に今もかかわっていただいております。

そういう本当に住民の皆さんの考案によって、住民の皆さんの意思の発露によって地域資源を探し出し、今申し上げましたような「雲南ブランド化プロジェクト」というものを推進して、雲南市そのものをブランド化していこうという活動を行っているところです。

ですから、とにかく雲南市民の方、そして外部の方、そういった共同作業によって地域資源というものを見出してきたと思っております。

○浅見 ありがとうございます。

それでは、加藤先生、お願いします。

○加藤 3市長のお話で、かなり丁寧にいろんな仕組みをつくっていただいていると非常に感銘を受けていますが、そのシステムができれば、市民がそれに乗ってくるかというのはなかなか難しいところだなというふうに思うことがいくつかございます。実際3市ではうまくいっていかれるかと思われませんが、市民の方が当事者意識というのでしょうか、これを持っているかどうかはまず何よりも大事だと思うんですね。

それというのは、やはり地域の中で生活をしていく蓄積の中で生まれてくるんじゃないかなというふうな気がしております。これまでの市民参加とか、市民主体のうんぬんという中では、何か決め事があって、それを合意するためにやっていくようなそういうところがあったと思うのです。それももちろん必要ですけども、ひたすらコミュニケーション、もしかしたら合意には至らないかもしれない、でも、意見交換をすることが何より大切だというスタンスが必要なのではないかというふうに、最近思っております。

たとえば、東日本大震災の復興の関係でワークショップをやって、いろいろと意見が出てきた。これを整理して、じゃ、投げた、投げていい計画案が出てくるかというところとそうでもなくてがっくりくるのがたくさんあるんですね。それは、いろんな場面で経験するのですが、でもいつかはそれが10年後、20年後にはつながっていくという、そういう長いスパンの中で考えて

いかざるを得ないなという、そんなような気がしております。ですから、ひたすら意見交換、相互交流、コミュニケーションが大事だというふうに思います。

それからもう一つ、都市計画、建築ですともものをつくっていく側、空間をつくる側になるわけですけれども、やはり行政の方と市民と、それからものをつくる方たち、その3者の価値観が共有されないと、いい地域にはなっていないというふうに感じております。

事業者の方は、法律さえ守れば何でもつくってもいいんだということが、実は首都圏ではまかり通っている部分があるわけですけれども、事業者も一緒になって、いい10年後、20年後、30年後に価値のある地域をどうやってつくっていくかということを、きちんとやっていかなくちゃいけないなというふうに思っています。

それから、3つ目ですけれども、子どもたちですね。子どもたちをどんなふうに育てていくかというのは非常に重要だというふうに思います。

ある有名なニュータウンで、小学校の子どもたち対象のアンケート調査をさせていただいたことがありますけれども、どうもこれは地方と都市部は違うかもしれないのですが、お母さん方も、子どもたちの成績をより良くするための教育ばかりに関心があって、地域に目がいていないという非常に悲しい現象を見ております。

ニュータウンの外に出ると、まだ農家が広がっていて、市街化調整区域であったりするんですけれども、そういう中で、子どもたち、小学校の様子を見ると、非常に地域の人たち、自治会、町内会の方たちが畑をオープンにして子どもたちに農作物をつくらせるようなことをやったり、あるいは学校の先生が地域のそれこそ聞いたことの無いお祭りに参加して、地域の文化に触れていく、小学校の児童と一緒に触れていく、そんなようなことを最近垣間見る機会がありまして、それこそ子どもたちに必要なことなんじゃないかなと思ったんですね。

そういう子どもたちが、地域のことに関心を持ち、愛着を持って育っていくと、20年後位には、少し自立した市民に育っていくのかなと、地域の価値を感じながら地域のことを考える大人になっていくのかなと、感じております。

○浅見 どうもありがとうございます。

それでは、北原先生、お願いします。

○北原 ちょっと観点変えて、いわゆるコンパクトシティというふうな計画の哲学的な話の中で、地域力とか、あるいは資源の発掘というのはどういう意味があるかという観点からお話したいんですけれども、コンパクトシティを形態論じゃなくて、ヨーロッパのEUが1990年代に出した概念で言うと、持続可能な発展という言い方をしたわけで、持続可能性というのを、

よく言語を見るとサステイナブル・ディベロップメントと書いてあるんで、開発はするように見える、でもそれは開発じゃなくて発展として考えると、実はただ続ければいいわけじゃなくて、我々は今この持っているものをより悪くすることなく、そして何とか発展という形で次に継承したいと、自分たちの地域をと。

そうすると何を発展させるかという、内発的な発展しかないと思うわけです。外発じゃなくて、内発的に自分たちの資源をどういうふうに長らえさせるかという内発的な発展だと。

ところが、例えばわかりやすく言うと、僕は弘前から来ましたから、リンゴを育てていくと、どんどん大きくしていくと、でもいつまでたってもずっと大きくしていくわけじゃなくて、ある段階から形は大きくならなくても、今度は中の蜜を溜めて味を濃くしてやらなきゃいけないと、それは形を大きくすることじゃなくて、まさに質の高い良いリンゴにしていくわけです。

いつのころからか、我々は開発というふうなものを大きくすることと考えてきました。だからコンパクトシティについて、縮めることはなくても、その蜜を濃くしなきゃいけない。そこを努力しなきゃいけなかったのに、例えば補助金というのは、ある意味で肥料なんです。うまくできていくために補助金があった方が動く、でもその後、でき上がったリンゴを濃くしていくためには肥料じゃないんですね。たぶん、地域のお日様にどう当てるかとか含めた細かい細かい農作物に対する農民の方々の工夫なんですよ。

あるいは、地域は誘致企業を持ってきた。これってある意味で言うと農薬なんですよ。本当は地元でやりたいんだけど、やっぱり来てもらえない、そうやって育ててきた。まちはリンゴがいっぱいできたと思ってきた。でも本当の持続的な発展というのは、おいしいリンゴを量じゃなくてもつくり続けることです。その内発的な発展というようなものをサステイナブル・ディベロップメントという言い方をしたいので、そういうことを考えた時には、あくまで地域の資源を、今何が強みで何が弱いかということをちゃんと見きわめて発展させなきゃいけない。でも内発という、何か自分たちがドメスティックに内輪で見ているだけじゃないかと言われるかもしれない。もし、そう言われるんだったら、外部のさまざまなアドバイスも欲しいかもしれない。

僕は、事業をよく「風の人」と「土の人」という言い方をするんですけど、土の人というのは地域の人たちで、余りにも地域になれ過ぎていて、いいものも気づかないし、土埃を被ってしまっているものがくすんでくるし、一方で嫌なものは見せたくないから埃で被せて隠してしまう、そこに風の人があると、その埃をポンと退かしてくれて、いいものも見つけてくれるし、嫌なものも言ってくれる。そういう人たちって今どういう人たちなんだろうと、例えば

外から来た人という意味で観光客、その地域を訪れてきたピュアな目線の観光客は風の人になります。一方で、その地域に外から来ている学生、例えば都留市の場合には都留文科大学に、全国的ですからいろんなところから来る、そういう人たちが、「あれ、おかしいですね」という話もすごくなるし、「いいですね」という話もいい。

一方、さっき加藤先生もおっしゃいましたが、子どもというのもそうでした、たかだか10年しか生まれてこない人間というのは麻痺していませんから、我々みたいに仕方ないよねという言葉を知りませんから、何でもできると思っていますから、彼らと議論すると説得するのは大変です。仕方ないからという言葉は通用しません。でも、彼らと、仕方ないからという言葉が通用しない連中とやっていくことが、おそらく地域の方々と議論していくための一歩のような気もして、こういう風の人たちをどう巻き込んでいくかという話です。

一方で、内発的な発展のためには、おそらくその地域の先人の知恵みたいなものが、このまちづくりにどう生かされてきたかということをもう一度唱えなきゃいけない。僕が今回、とにかく驚愕の事実というか、皆さんもご存じだと思いますけれども、震災を受けたところに行って何がすごかったかという、皆で避難地としてやっていた小学校の校庭とかそういうところが全然機能できなくて、実はどこが助かったかという、皆さんご存じのとおり、神社の空間が生きている。これを皆見た時に、やっぱり神がかりだと言ったんですよ。神じゃないんですよ。そこに神社を立地させてきたのは我々の先祖です。たぶん、今までたくさん悲劇を受けているんですけども、1000年の中でだんだん波の動きとかいろいろ考えて、同じ高さであっても来ないようにつくっているんですね。

集落に行くと、「うちの集落は全員助かりました」、「何で?」、「市から〇〇小学校に逃げろと言われたけれども、うちのじいちゃんからの教えで〇〇神社に逃げろと言われた」、だから皆助かったと。そういう先人の知恵みたいなものを、ちゃんとまちにつくられてきたものを、20世紀の開発の中で、「まあ、ここにこれができたら大丈夫だろう」と言って、そうやって我々はわりと軽く見てきてしまった。そういうふうなものをもう一度思い出すのも、僕は資源の発掘だと思います。

そして、復興だけではなくて、中心市街地の問題も一緒だと思うんですけども、僕は、中心市街地の問題を捉えていく時に、特に地方都市は中心市街地がしっかりしなきゃいけないので、その問題を捉える時に、一つのキーワードは、あの永六輔さんが「商人」という本の中で書いていて、これを小林重敬先生がアピールしていたんですけども、永六輔さんの言葉で、「中心市街地は文化を育ててきた」、「郊外のショッピングセンターは文明に支えられてきた」

と、この文化と文明という言葉と一緒に中心商店街と市街地と郊外ショッピングセンターを対比した最高の文章だと思うんです。つまり、中心市街地ってやっぱり文化を育ててきているわけです、いろんな地域の文化を。それをちゃんと考えなきゃいけない。

あのよさこいをやりたい学生たちだって、うちの大学の郊外ショッピングセンターかモールでやりたいとは思いません。古い古い商店街で歩行者天国にしてやりたいんです。弘前高校という学校は、ねぶたの時に、ねぶたの1週間、2週間前にその高校だけ特別に弘高ねぶたというのをまちの中で引っ張らせてもらっています。それは、やっぱりいくらシャッター街になったとしても中心市街地でやりたいんですね、そうやってどんどん文化が育んできたまちの歴史があると。

郊外ショッピングセンターは、車、大型冷蔵庫、冷凍技術、そういった文明に支えられてきた、成り立ってきた。最後に残るのは何かと、文化というふうなものをキーワードにしながら中心市街地を考えていくと、それは将来、郊外ショッピングセンターは勝てないんです。だから彼らは映画を取り込もうとしました、映画の文化を。ぜひ、一度見ていただきたいのは盛岡です。盛岡は条例で郊外ショッピングセンターに映画の、いわゆる複合施設を入れることを禁止しました。ずいぶん怒られたみたいですがけれども、なぜか。中心市街地が映画館通りというんですよね。その映画館通りを守るためには、郊外ショッピングセンターに映画をつければ市民は喜ぶかもしれないけれども、映画はやっぱりまちで見て、歩いて帰って、飲みながら帰ればいいという、そういうライフスタイルをつくっていった。その地域が持ってきたそういったライフスタイルみたいなのも地域資源だと思います。そういうのをもう一度再発掘して生かしていくというのが、僕は発掘という言葉で言いたいなと。何かうちに良いもの無いかじゃなくて、そういうことをもう一度見てみる。時代に合わなくなったものは、またどんどん風の人の意見を入れて変えていけばいい。でも、やっぱりそういうものを資源と見る見方がまちには必要かなという気がしています。

以上です。

○浅見 ありがとうございます。

皆さんに共通していることは、小林市長がおっしゃった、「川を遡れ、海を渡れ」という言葉がありましたけれども、その地域の源流となる何らかの資源、ないしは文化を見つけ出せということと、しかも海を渡れというのは、外からその地域を見てみろということだと思います。

実際、地域力といった時は、市民の啓発をかなりいろいろなところでやっておられますが、一方で、その海を渡れの方は、なかなかその市だけではできないので難しいという感じがいた

します。先ほども海を渡れる的な発想で見つけ出したというお話もありましたが、ただ、外の方というのは、そこに住んでおられる方ほど、責任意識が無いかもしれないわけですね。そういう中で適切な助言を仰ぐには、何か方法が必要かもしれませんし、あるいは、そういう人ももしかしたら発掘していかなければならない気がするのですが、そういう海を渡れというんですか、その部分をどうしたらいいというの、何かありますでしょうか。加藤先生お願いします。

○加藤 風の人、やはり外から来た人は、やっぱり浅見先生がおっしゃったようにいずれは引いていくわけですね。いろんな知恵、それからいろんな技術、それからコミュニケーションのツールを持って出かけて、じゃ、皆でこんな意見交換しましょうと言って、地域の皆さんの中にある潜在している力、地域の良さ、地域の文化や技術とか、そういうものを整理するという、そういう役目だと思うんですね。

でも、実際にまちを運営していくというのは、その地域の人たちなわけですから、それはいずれは、風的人是引いていく。ですから、全くのお手伝いだと思っています。最近かわらせていただいている福島県のいわきとか、それから石巻なんかでもそうなんですけれども、私たちは引いていくんだよねって言いながら、一生懸命いろんな課題を整理させていただいているところです。

○浅見 ただ一方で、そういう人たちに着目してもらわなければならないわけですね。最初、まずは来てもらわなきゃいけないですね。そのきっかけづくりをどうしたらいいのか。ある古文書で何か発見したとか、博覧会を行ったとか、何かきっかけづくりも、地域で考えていく必要があるのかもしれない。

○北原 さっき市長会でという話で、例えばいろんな市の連携で自分たちの弱みとかそういったものを含めて、いろいろと議論するような機会はまず一つあればいいと思うんですけれども、都市計画学会の復興に関する研究会で、僕が所属しているグループでやっている話ですが、今岩手県の北上市に、「きたかみ震災復興ステーション」というのを作りまして、そこから沿岸部を支援するという形でやろうとして、実際に今やっていることは、北上市役所という、実は、地震の被害はあっても津波は全く関係なかったところが、大槌町と大船渡市の仮設住宅の全ての支援員の給料を払いながら支援しているんですよ。それは市長といつも話しているところなんです。 「いつやめたらいいんだろう」って。最初は大船渡も大槌も手が回らないから、「わあ、ありがたいです」って言って、国の緊急雇用とかのお金を使いながら、数億のお金をかけて2年、来年もつくだろうとか言いながらやっているんですけれども。

でも、考えてみたら、それを自分たちの地域が、もう自分たちのメンバーでやっていかな

やいけないんですよ。でも、今できない。それに僕らも今度学会としてお手伝いしているわけです。僕らが行って、「仮設からのまち育て」なんて言って、「今からさあ自分たちで、自分たちの空間を自分の場所に変えていくためにやらなきゃいけないよね」って。でも、僕たちはいつまでもいられません。いわゆるコミュニティー・イネーブラーですよ。その気にさせる。向こうも皆も、いつまでもいられないことがわかっていますよね。

でも、今ありったけのことを僕らは情報を持ってくるからやりませんかという話をして、何回か揺さぶったら、大槌の活動のグループが「大槌ひと育て×まち育て大学」っていうのをつくりまして、若い人たちを育てていこうと、その人たちで次を担うんだというのを明確につくって、その講師で来てくれって僕らの学会に来たんですよ。今僕は、都市計画学会のそのメンバーとして大槌に行っています。

そうすると嬉しいのが、最初は30代、20代、40代だったのが、最近地元の高校生を今度呼び始めて、「この子たちだよ」って。そういうふうに来てくれると、まだ稚拙かもしれないけれども、自分たちがやらなきゃっていう形にだんだん移っていく。その時こそ僕らがいろんなノウハウをとというんで、今度は「ISHINOMAKI2.0」の人たちを連れていって、「あのね、外部からのこういう芸術家みたいな人たちと一緒にやっている動きもあるよ」って見せてしまう。すごいと思う。一方で、「ISHINOMAKI2.0」っていうのは、地域の地域の高校生なんてつながっていないから、大槌を見せてあげる。とにかくそういうチャンスを僕らがつくっているネットワークの中でどんどん見ていくことで、「あ、こういう方法があるな」って言う。

とにかく知らないんですから、何にも。情報が無いんですよ。その情報を共有していく中で、自分たちのまちで、「あ、うちこれができるし」みたいなことをやっていくっていう話のつながりでやっていくと、結構僕はその風の人効果みたいなものがあるって、なおかつ、最終的には土の人がその気にならなきゃいけないというプログラムを、ちょっと長丁場になるかもしれないけれども、今つくらなきゃいけないのかなっていうのが、たぶん復興の持続性だと思うんですけれどもね。そのあたりは垣間見えているけれどもまだまだです。でも、そういうのが、僕ら学会から行っている専門家の役割かなと思います。一方で、復興計画の手は動かしますけれども、そうでは無い部分で、結構それが一番大事かなという気はしています。

○速水（雲南市長）　ちょっと視点が違うかもしれませんが、今の外部からの人の捉え方ですけども、今の、例えば地域おこしとか活性化とか、そういうことについての外部からの人というのは、本当に外部から来て、雲南市で本当にさっきも言いましたように、さまざまな人が努力してくれております。その方々は、少なくとも犠牲的精神でも何でもなくて、自分

たちがここで努力することによって、それが自分の育ちにもつながっているということで来てくださっている人がたくさんいます。

例えば、先ほどもちょっと控え室で話していたんですけれども、早稲田大学大学院の建築学科の院生の皆さんたちが、本当に十数人単位で私たちのまちに常に入ってきているんですね。それは大学での学びを座学とするならば、それを生かすフィールドとして雲南省のさまざまなその分野で活躍して、言ってみれば実学と僕は言っているんですけれども、そういう共に頑張ることによってそれぞれが自分なりの成果を享受するというのが、やっぱり地域の活性化のためには大切だというふうに思います。ですから、災害援助で私どもの市職員が東北の岩沼市に1年間行っております。でも、そういった市職員は必ず任期が来れば帰るわけで、やっぱり外部からの人に対する視点については、そういった仕分けが常に意識されながら語られなきゃいけないんじゃないかというふうに思います。

○浅見 ありがとうございます。

加藤先生がおっしゃったのですが、システムをつくっても乗ってこない。例えば、行政で新しい仕組みをつくって提案しても、なかなか市民の方が乗ってこないとか、乗ってきても必ず同じ人しか来ないとか、そういうことは多々ある気がするんですけれども、この辺をうまく打破する仕組みを3市長は考えられたのではないかと思うのですが、経験談がありましたら、ご披露いただけますか。

○速水（雲南市長） 確かに、伝えることと伝わることは違って、伝わらないと参加もしてくださらない。でも、行動を共にすると、最初は嫌々ながらもだんだんおもしろくなってきて参加してくださる割合が多くなるということで、雲南省では映画をつくりました。映画「うん、何？」というものなんですけれども、その監督が島根県出身ということで、今その方がつくられた映画で隠岐の島を拠点にした「渾身 KON-SHIN」という、聞かれたこと無いですかね、隠岐の相撲を題材にした、それが4作目なんですけれども、島根の地域資源をテーマにした映画づくり、それに住民の皆さんにボランティアを募ったところ、本当に、本当にたくさん参加していただいて、やっぱりエキストラで登場できるという甘さもあったんですけれども、そういう甘さというか餌というか、動機づけが。だから、できるだけ動く動作に巻き込むという、そういったことが大切じゃないかなという気がしております。

○浅見 どうもありがとうございます。

もう一つの話ですが、先ほど、各市長から今後は30年後だとか、そういった長期的に見ていかなければいけないとか、あるいは震災においても、平常時のまちづくりというのが重要だ

という話がございました。

そういった長期的なものを見通していく方法論、ないしは平常時のまちづくりで特に今後注意していかねばならないこと、こういうことについて議論していきたいと思います。小林市長、お願いいたします。

○小林（都留市長） 私は、その土地の価値はその土地に住む人の価値で決まるといふ、フランスの諺があるんですけども、その言葉を信じていて、先ほど長期計画の話が出ましたけれども、私どもの長期計画は8つの分野に分かれていまして、そのトップ項目に「教育首都つる」を目指したまちづくりというのを掲げています。

これは、先ほどご紹介いただきましたけれども、都留市には都留文科大学という33,000人の都市に3,000人の学生が住んでいるという市立大学を持っています。いわゆる都留文科大学を中核としていろいろな多彩な教育とか研究施設を集積させ、それとともに、さっき言った3つの環境を都留市が持っているわけですし、それを包含した全ての市内を教育フィールドに見立てていく。そして、そこへ住んでいる人たちも、また尋ねてくる人たちも、本当に能動的に主体的に学びというものを実践していく。そして、多くのものを学びによって身につけても、持っているだけでは宝の持ち腐れですから、その成果というものを人に生かしていく、家庭に生かしていく、地域に生かしていく、職場に役立てていく、それから社会に貢献していく、そして生きがいや働きがいを持った生活をしていく、そういう地域社会をつくるというものです。

非常に格好のいいコンセプトを持った教育首都構想の実現に努めておりまして、そここのころをたまたまさっきスパンの話が出まして、私もこれで市長になって15年目なんですけれども、その間ずっとそんなことを考えていました。たまたまここへ来て、この4月には「山梨県立産業技術短期大学校 都留キャンパス」が開校することになりまして、それから平成26年4月には総合制の高校、県立ですけれども、これが県立では最大の高校ができます。それから、もう一つ、平成28年4月を目指して、4年生の看護大学の看護学部が来ることになって、今準備を進めています。そういう意味で、ある程度そういった環境が整ってきた。

それに加えて、今言ったような環境フィールドとか、大学にもフィールドミュージアム構想というのがありまして、都留市全体の生態系を調べていますが、そういったいろんなフィールドが整ってきますので、それを最大限に活用して人づくりをしていく。とにかく、その土地の価値を決める人づくりをしていくことが、平常時のまちづくりだと思っています。

○浅見 都留文科大学の学生たちも全国に羽ばたいていくわけですから、必ずしも都留市に戻ってくるわけではないのだけれども、そういうことも含めて人を育てるということですね。

○小林（都留市長）　そうです。それでさっきの外の視点というのは、本当に都留の大学というところは全国から学生が来ていますから、地元の間人というのが1割とか、山梨県の間人が1割とかそういう学校ですから、非常にそういう意味で外の目というのはあって、さっきの市民委員会にも学生たちがつくった委員会が2つ、3つありますし、そういう意味では外の視点というのは非常に入ってきている。

○浅見　学生の視点というのも外の目として生かすわけですね。

○小林（都留市長）　目として捉えています。

○浅見　なるほど。ありがとうございます。

それでは、栗原市長、お願いいたします。

○栗原（沼津市長）　一言で言えば市民との協働ということなんでしょうけれども、市民との協働って我々が言うと、市民の側は面倒くさいことを俺たちに押しつけるんだらうと、必ずそう思うんですね。楽しいことを一緒にやるということが一つの手なんだらうと、私は思っています。

例えば、私どものところでは市街地の真ん中に中央公園という公園がございます。だいたい、小学校のグラウンド位のところなんですけれども、そこに4年前に市の商工振興課みたいところが発案してビアガーデンをやりました。コンセプトは沼津のおいしいものを集めて、沼津自慢フェスタということでやったんですね。ロケーションもいいし、ちょうど天気も良かったものですから、1年目、2年目と大変なお客さんが入って、市がやる行事にしてはものすごく成功して、だいぶ皆さん、市の職員も自慢していました。

私は、だったらこれ、せっかくだったらば、市は全く手を引いて、民間でやってもらったかどうか。ワインバーのお兄ちゃんとか、八百屋さんとか、いろいろまだ2世、3世じゃなくて、家賃が安くなったものですから、中心商店街は。外から来る人たちがいるんですよ。そういう人たちに任せてみたんです。そうしたら、たぶん過去2回よりも倍、軽く倍、人が集まりましたし、軽く倍、楽しいイベントになりました。だから、いかにやっぱり民間というのはすごいなというのを、私は如実にその時に感じました。

よく、まちおこしは、「よそ者、ばか者、若者」と言いますよね。ばか者は余り出てこないんですけれども、よそ者は本当に多いんです。沼津というところもよそ者が結構多いです。沼津で生まれて沼津で育ってなんていう人は、少ないんです。正直言って、私もそうじゃありませんから。だから、学者の先生みたいに、とっと一時来てアドバイスして帰っちゃうっていうんじゃないくて、うまく行けば住んでくれるかもしれない人たちが結構いるんですね、潜在的に。

人口減少とかも非常に悩んでいますし、若い夫婦者が来てくれればいいと私も思いますけれども、実際には来ません。ですから、だったらもう人生長いんですから、リタイアして年金生活で、あと年金生活でもあと20年、30年軽く生きますので、そういう人たちに沼津に来ていただくということを一生涯懸命考えています。

それから、市民との協働で、もう一つ私がポイントだと思うのは、先ほどもちょっとお話ししましたけれども、市の職員はやっぱり役所言葉で話すんですね。例えば、さっきの男女共同参画なんていうのも、どちらかと言えば役所言葉ですよ。それから、多文化共生なんて言うでしょう。要するに、一言で言えば、外国人と仲よくしようぜっていう話でしょうね。そう言えばいいのに、多文化共生。そういう言葉を平気で使っているんですね。そうすると、市民はそこで引いちゃうんですよ。こんな連中と話していたっておもしろくも何ともないと。そこは市の職員の意識を変えないと。

一番、私が4年間、今4年半になりましたけれども、一生懸命やっていますのは、市の職員をいかに市民目線にするかということなんですけれども、これはものすごく難しいですね、正直に言って。長年染み付いちゃっていますから。でも、これをやっていくことが平常時一番大事だと思います。災害の時も、市の職員がしっかりしていれば、それはやっぱり非常時には大変役に立ちますから。それから普段、市民の協働も、市の職員がまず率先しないと話になりませんから。

そういうことで、地域力を高めていくというのは、もちろんいろんな方法がありますけれども、我々の立場から言うと、市の職員のレベルを上げると、非常に難しいけれども、人様のことを決して言えない市長ですから難しいですけれども、そういうことじゃないかなと私は思っています。

○浅見 ありがとうございます。

それでは、速水市長、お願いいたします。

○速水（雲南市長） 私は3つほど言いたいと思います。

まず1つは、先ほどお話ししました地域自主組織の充実、これを図っていくこと。

それから2つ目は、自分の仕事として雲南市に居を構えて、いろいろ地域とかかわりを持ってくださる外の方を取り込むこと。

3つ目は、やはり子育て、教育について、学校と家庭と地域と行政が一体となって取り組むこと。

今、3番目のことについて、具体的に雲南市は、「夢」発見プログラムというものを実施し

ておまして、幼稚園版、小中学校版をやっていますが、特に「夢」発見プログラムの中学校3年生では、7つの中学校があるんですけども、それが9月の3日間、一斉に雲南市の企業に協力いただいて、就職面談試験をやるわけですね。面接試験を受ける。落ちはしないですけども、実際に自分はなぜこの職場を職場体験の場として選んだかということもずいぶん話して、それでいろいろ面接官からアドバイスを受けて3日間職場体験をします。そうすると、まず違った中学校の生徒同士と一緒にその仕事を共にするという、そういったこともものすごく刺激になるし、3日間終わるとその体験をする前とずいぶん違っているんですね。積極性が出てくる。

そういったことで、大人も地域も職場もかかわるということで、大人は教え育つ、そして子どもは教え育てられる。大人も子どもも成長する、そういったことを取り組んでおりますが、これもこれから恒常的にずっとやっていきたいというふうに思っております。

○浅見 どうもありがとうございます。

大学も就職が厳しくなっているので、そういう意味ではぜひ大学もプログラムに入れていただくといいかもしれません。

それでは加藤先生、お願いいたします。

○加藤 血縁、地縁、社縁というんでしょうかね。社縁というのは都市部の話になるかもしれないんですけども、やはりコミュニティーには、家族、それから会社を中心としたコミュニティー、それから地域でのコミュニティーがあると思うんですね。今は、会社はもう非正規雇用というか、それ絡みで非常にコミュニティーを形成しにくくなっている。それで、血縁にしても結婚しない方も多くなっていて、あるいは結婚していても誰かが亡くなっていていずれは1人になっていくわけですね。ですからはっきり言うと、地域で生きていくしかないわけですね。地域で生きていく覚悟というのを皆さんで共有して、じゃ、この地域どうしていくかということをやっぴり皆で考えていくという、それがやはり私に与えられた使命なんじゃないかなというふうに思います。

そういう意味では、市長がおっしゃっていたように、やっぱり人づくりというのが重要で、のべつ幕なしコミュニケーションをとっていくことですね。都市部で言いますと、例えばマンションに住んでいて、もうあまり外に出ていらっやらない方になるべく外に出てきてもらう。そのためには、地域で暮らすことが、やっぱり楽しくないとだめですよ。

それから、もう一つ。あとは時間軸で、地域には埋もれているいろんな財産、資源がたくさんあるんですね。例えば、これも東北の復興のお話ですけども、生業をどうしようとい

う時に、普段主婦の方々がつくっている日常の食事、料理がなかなかおいしくて、それがひょっとしてちゃんと道の駅なんかをつくって、そこで売れば売れるんじゃないのっていうのが、実はあるわけです。そういういわゆる地域にずっと蓄積されてきた生活文化、それを地域の人たちも共有しなきゃいけないし、それを活用しなきゃいけない。そんなようなことを感じています。

○浅見 ありがとうございます。

それでは、北原先生、お願いします。

○北原 平時のっていう話をする場合に、今出ている言葉で、「事前復興」という言葉を少し言いたいですけれども、これは去年こういったフォーラムで講演された中林先生なんかがい始めた概念で、事前復興、事前に復興するのはおかしいじゃないかという話もあるんですが、その話が実は平時のまちづくりがどうできているかによって復興につながっていくっていう発想なので、そのお話をしたいんです。

そのことで最近、去年、一昨年あたりから、講演してくれとか話を聞かせてくれと言われて、三重県庁に呼ばれて、愛知県庁に呼ばれて、今度静岡県庁に呼ばれるんで静岡に行くんですけども、何なのかという時に2つの捉え方があって、三重県はずいぶん前からやっぱり東南海とか南海の話はかなりシビアに考えていて、「さきもり塾」っていう三重大学が一緒になって、防人っていうのは例の九州の話ですが、さきもり塾っていうのをやって、県民にどんどん勉強してもらって、いわゆる防災教育を徹底的にして、そして自主組織みたいなものをつくって、何かの時にどうやって皆で安全に逃げるかみたいなことを考えていく。それは事前復興という話よりは、どちらかというとなら防災教育を徹底してやっていくっていう、そういう話をしているんです。

ところが、例えば技術論からいうと、愛知県庁が僕の話聞いて、そして、始められていていいなと思ったのは、技術の方から話をしますと、実は復興の時に今一番問題になっているのは、復興公営住宅というものをどう配置するかという話でして、これは制度的に言うと、公営住宅の範疇にしか入っていないので、とりあえず5年間は収入に関係なく被災した人を全部入れられますけれども、5年経つと公営住宅と同じようにして、収入によっては出ていかなきゃいけなくなる。そうすると、ただでさえ各自治体は市営住宅っていうのが割とだぶついたり、建て替えのためのお金なんかもう無いからと言って、とりあえずそのままずっと自然に人が居なくなっていくように、もう政策的に空き家にしていこうみたいなことを考えた時に、突如、僕が今おつき合いをしている石巻あたりは、2,000戸近くをつくらなきゃいけないわけで

す。

そうするともう目に見えているわけです。5年後、10年後に、これはどうなるんだろうと、また空き家になっちゃうよと。そういうのを今から考えて、平時の公営住宅施策の中に、今の困った時の復興公営住宅の仕組みを入れるっていう発想で見ればいいよという話をしたら、今、実は愛知県庁は、県営住宅とか、あるいは各自治体の市営住宅とかのストック、空き家、そういったものを全部データベース化して、もしもの時に、パッと住めるように、使えるもの使えないものを今からチェックしていこうという話をしていく。こういったものというのは行政でできる話です。

あるいは、東北ではみなし仮設とって、仮設住宅が無い時に、人の家を借りて、実は、僕のかみさんの実家も今人に貸しているんですけども、岩手県に、そういうのがどんどん出てきて、後づけで出てきているんですが、そういうのも含めて、住宅地の空き家っていうものをちゃんとチェックしていく。それは決して復興のためじゃなくて、そのまちがどれだけ空き家を抱えているかというようなことを見ておかなきゃいけないわけです。気がついたらどんどん虫食いになっている。地域の将来を考えるためにも空き家とかのストックを見ておこうみたいな話も、実は、平時のまちづくりで復興にもつながるものです。

もう一方は、参加と協働から言うと、募集移転にしる、区画整理にしる、決して簡単ではありません。地域の方々に何回も話をし、揉めて揉めて結論が出ません。我々が平時にやっている公園づくりのワークショップとかだと、3回位やって皆の意見を聞いて、そして、僕はあまりそういうの好きじゃありませんけれども、やっぱりやって、皆さんの意見を集約しましょう。楽しいワークショップをして、僕たちの意見がちょっと反映した公園ができたことと喜ぶわけです。でも、自分たちの将来がかかっているような話で、ワークショップって片仮名が似合わないような、そういった議論をして、意見の擦り合わせをしている時に、多々ぶつかります。

日ごろのまちづくりの中で、行政とそして住民が和気あいあいというのではなくて、本気でもしかしたらぶつかってしまう、そういう経験をしていない我々は、そっちになってしまうとシュリンクしてしまっ、すごく居づらくなってしま。でも、本来ワークショップとかってというのは、まさにそういう矛盾している複合的にいろんな要素があって、単純に決められない、その時に両方の意見を聞いてどうネゴシエートしていくかという、そういう協議というような場なんだけれども、どちらかという市民の意見を聞くといいものができるよねっていう形の方法論にちょっと終始してきた参加型まちづくりもある。参加型というのはすごく責任というか、覚悟が要ることだということ、僕は地域でやっぱり行政は気づいていくべきだと思う

んです。

さっき、栗原市長が、市民の目線で市の職員が語れない言葉で言うてしまうっていう話がありました。かつて、僕は弘前市役所から道路拡幅工事で移転交渉しなきゃいけない、あるいはお金を払わなきゃいけないという人たちとの相手をする受託研究を受けました。そんなわけのわからない受託研究で、何だろうと、たぶん公平にしゃべってくれるだろうということなんです。地域の方の寄り合いがありまして、集まらないんですよ。市の人説明会へ来ると、皆どうせいろんなことを言われて、難しい言葉で言われて、補償できませんからと言って、そしてごまかされるだろうと言うんですよ。

そこで何とか人を集めたいからって、じゃ、僕は一緒に勉強して、道路を広げる時の敷地がどうかかったら、どういう補償をするかということ市の人から一緒に学びまして、そして、パワーポイントをつくって、さあ、皆で考えようというんで勉強会しますって言ったたら、皆見に来まして、最初、感想で、「最初からそう言ってくれたら俺たちだってわかるのに」って言うわけですよ。 「何で市の人たちってそういうふうに言わないの」って言って、そうかと。

そう言ってくると初めて動いていくんですけれども、でも、それ、何で俺がこんな委託研究を受けなきゃいけないんだらうというのを実にすごく思っていて、そういうことから言うと、もっと本当にものを見せて、ぶつかっておいて、そういうことをしておかないと、本当に有事の際に、短い時間、しかもスピードが急がなきゃいけない時に、とってそんなもの結論が出てこない。だから、いかにぶつかり合いながら答えを出していく経験しておくかという、方法論的にそういうふうなことも僕は事前復興という枠組みに入るのかなと。参加はいいんだけど、本音を言って「違うべさ」っていう話をして、じゃ、どうするっていう話の、そういう体験というのを、僕らは避けるんだけど、いや、それをしないと本番の時にどうしようもないよっていう話も、ちょっと最近感じています。

○浅見 はい、ありがとうございました。

最後のお話は非常に深いような気がします。最近、市民参加というと、行政が市民の方に寄っていくような話ばかりしている気がするのですが、一方で、公正、公平に行政はやらなければいけないとすると、あるところではぶつかる部分もあると思うのです。それをどのように対処していくかは非常に重要だと思うのですが、先ほど栗原市長から、市民目線へというふうにおっしゃったんですが、市民目線の意味、これが結構問われているような気がするんですが、何かご意見ありますでしょうか。

○栗原（沼津市長） 私はそんなに深い意味で言ったんじゃないで、簡単に申し上げると、先

ほど言ったようにコミュニケーションが大事だというのは先ほど出ていますよね。ところが、市の職員、うちの職員だけなのかもしれないけれども、国から押しつけられる言葉をそのまま使うんですよ。これがまず間違いなんですね。そんなものは、先ほどもちょっと例を挙げましたけれども、市民からすると、そういう言葉では、普通のコミュニケーションの妨げになるということに気づかないんですよね。そういうところから直していかないと市民目線にならない。

例えば、市の主催のいろんなイベントをやります。そうすると、民間であればお客さんがどのくらい来なかったか、どのくらい来るか、お客さんが来なかったら、そのイベントは明らかに失敗なんです。ところが、市がやるものは税金ですから、くす玉が1個割れなかった、そういう段取りが悪かったら大問題になるけれども、お客さんが来ないことについては余り問題にならない。そういうばかみたいなことがあるでしょう。そういうことを直そうぜっていうふうに言っているんですよね、私は。

だから災害のことについてもそうですけれども、結局現場なんです。現場に行って、いくら危機管理課が机の上でああでもないこうでもないって言っても、現場に行って市民と話をし、そうすれば命にかかわることですから、これは先ほどの地盤高なんていう言葉ですよ。普通我々も地盤高って言うけれども、地面の高さって書けばいい話なんだけれども、そういうことをやらないとやっぱりコミュニケーションできないねってことを私は言いたくて市民目線ということを申し上げた。大した深い意味はございません。

○浅見 ありがとうございます。

ただ、ぶつかるためには、まず理解しないとぶつかれもしないですね。

○速水（雲南市長） 本当にそのとおりでして、私ども、毎年市政懇談会というのをやるんです。今年のあるいは今年度の課題はこうですというようなことを資料に基づいて話をするんですが、ともすると、あまり意識しないで行政用語を使っている。確かに話をしていると、「それで、それはどういう意味ですか」と、時々聞かれます。だから、そうしたことが無いようにということで、心掛けた懇談会をやっております。そして市民の皆さんと同じ目線で話をし、市民の皆さんのニーズをしっかりと把握し、そして行政のレスポンスを早くするというのが、その自治体としての務めですから、そういう務めをしっかりと果たすためには相互理解がしっかりとされなければいけない。したがって、その時には難解な用語等は本当にはあってはならないということだと思えます。

○浅見 ありがとうございます。

フロアから質問ないしご意見がありますでしょうか。

では、お願いいたします。

○阪口（高石市長） 大阪府の高石市長でございます。本日はご苦勞さまでございます。

いろいろとお話を伺いまして、各市長の皆さんもあるいは各先生方もご努力いただいております。まして感服しておるところでございますけれども、ちょうど沼津の栗原市長のお話、実は資料も含めて拝見して、関心を持って見ていました。

沼津市もそうですけれども、私、大阪府の高石市と言いまして、堺市の隣でございます。ずっと大阪湾岸に面しておるわけです。ずっと岸和田とか、あのだんじり祭りの、またカーネーションで有名になりましたけれども、貝塚、あるいは泉佐野の、名前売ろうかというような市長もいましたけれども、関西国際空港があつて、ちょうど和歌山の方もおられるかもわかりません、高知の、四国の方もおられるかもわかりませんが、やはり、東南海、南海、東海三連動地震というのが、やはり非常に南海トラフの地震というのが非常にクローズアップされていまして、東北の大震災以降、やはり行政の重点課題というものになっておるわけでございます。

私、栗原市長の資料を拝見していておもしろいなと思ったのは、この津波避難タワーを27ページですか、これを次のページを見ると29ページですが、築山にすると。その発想というのは、私も実はそういうふうにするようにしておるんですが、非常にいつ起こるかわからない。特に大阪は非常に派手なというか、非常にパフォーマンスの上手な知事であり、市長がおられますから、大変だと、大阪の真ん中まで心齋橋とか、津波が来るんだというようなことをおっしゃいまして、2倍だつてというようなことで大変だったんですけれども。

これはもう私はピンチをチャンスにしようじゃないかと。よし、わかったと、それだけの体制をつくろうじゃないかということで、防災避難訓練等いろいろ取り組みまして、実は、やりましたら、うちは6万人のまちですけれども7,900人位が総合避難訓練をやってくれました。非常に関心が高かったです。その中で、あるおばあちゃんが最後までずっと聞いてくれるわけですね、訓練の最後まで、講評まで、全部。「どうもご苦勞さんでございましたな、寒いところ」、1月15日にやりましたから、今年の。「寒いところえらいすみませんな」という話を申し上げたら、目をきらきらさせまして、「何か生ける希望が湧いてきました。もう、あきらめていました」と。ずっとあの間、映像がずっと流れていましたからね。もし万が一あんなものが来たら、うちはフラットなまちで高台一つ無いので、全部いかれちゃうなというようなことで、そういうことをして、ああ、やってよかったなということを感じたんです。

まだまだ沼津市のところまで行きませんが、何が言いたいかと言いますと、ピンチはチャンスで、これをどういうふうにして市民にとって逆にやる気というか、前向きに持っていけない

かなということも思っています。ただ、この避難タワーをうちもつくろうと思っただけでも、これ、何か全然味気無いですね。それを築山にするという。ちょうど、うちは幼稚園に1つつくろうかと思っておるんですけども、海辺に近いところに。これ、滑り台にしたら良いかなということのをちょっと思いました。

いろんなことをポジティブに考えるというか、そういうことが一つ大事ではないかなということを感じました。

本市では、実は今日は都市計画学会の竹内先生も、後ほどまた浅見先生もお世話になります。本市はちょうど臨海コンビナートも抱えている関係で、かつて非常に素晴らしい自然の海があって、海水浴場もあったんですけども、その名残と申しますか、砂浜があった名残で、もう砂は無いんですよ、その観光的なものは何も無いんですが、臨海部は四日市とあの辺と同じでコンビナートです。ただ、都市計画で第1種低層住居地域、あるいは風致地区というのが残ってしまっていて、高い建物を建てられない。そんなばかなと言ったらおかしいですが、時代が変わってしまっているわけで、全盛期のそういうふうなものが残っておるといふふうな。

どんどん都市計画の見直しをやっています。そして、この間ちょうど都計審でいろいろ守れという声もあったんですが、何とか災害に強いまちづくりをしていきたいということで、まあご理解いただきまして、都計審も通りまして、一応、都市計画規制緩和していきました。無論、守らないかんというものもあるかと思う、北原先生がおっしゃるように大事なものもあると思っただけ、昔はそこが海水浴場だったので、グラウンド戦略というようなことで羽衣天女のイメージを売り出そうとか、そんなことをやっています。いずれにしても何かこのいわゆる災害とか防災とかいうことを逆に僕はチャンスにして、ピンチじゃなしに、何かまちを良い方向に向けて市民がやる気、あるいはまたここでこれからも住み続けようと、あるいは若い人も寄ってくるというふうなまちにできないか、そのために都市計画とかいろいろ規制緩和とか、実は人口を増やすところで、その今の準防火とかそういったことをやりながら、RC化とかいろいろ新築住宅を建て替えしたら固定資産税を減免しておるわけです。いろいろなことをしながら、前向きに捉えてやっておるんですが、ぜひ都市計画的なそういう観点も含めて、いわゆるピンチをチャンスにするというか、できたらそういうお考えをいただけたらと、よろしく願います。

○浅見 ありがとうございます。

ほかに何かございますでしょうか。

○ナガイケ 川崎市のナガイケと申します。よろしく願います。

加藤先生から地域で子どもをどんなふうに育てていくかというお話があったと思うんですけども、今、社会的な問題として、子育て世帯の共働きですとか、あと、高齢者の孤立化とかそういった問題があると思うんです。コミュニティーの中に子どもとか子育て世帯とか高齢者を巻き込んで、コミュニケーションが生じていくようにしていく仕掛けが必要なのかなと思っているんですけども、そのような仕掛けで、このような事例がありますとか、こんなビジョンがありますとか、そういったことがあれば教えていただきたいです。

○加藤 例えば、何か毎回同じ事例で申しわけないのですが、こういうことがありました。

これも有名なニュータウンでのことなんですけれども、ニュータウンに住んでいる子どもが緑道を歩いていたら何か不思議な石があると。その石には、実は干支の動物が描いてありまして、ずっと辿っていくと十二支になっているんですね。いや、これこんなふうになっているけれども、一体、じゃ、このニュータウン誰がつくったのという話になって、実は、それは小学校の先生もよく知らなかった。そういう中で、じゃ、まちを知ろうということになって、そのニュータウンをつくった人を呼んできて、子どもたちとニュータウンの緑道をずっと巡って、それで地域の歴史を知り、地域に関心を持つきっかけがつけられました。

そのニュータウンでは、とにかく次の世代がニュータウンに戻ってくるように、ふるさとの感じられる空間計画にしたいということで、地域の資源として地形や神社等も比較的に残しながら、それを緑道でつないだりしています。あるいは散策マップをつくってそこを通るイベントを開いたり、地域でもいろんなチャンネルを設けているんですね。散策マップを持って、手にとって、子どもと親とそれから地域の人たちが歩くというようなことを、もう日常茶飯事にやっています。そういうことを積み重ねていくと、やっぱり幼少の頃に非常に楽しかった思い出というのがやっぱり蘇って、それでまた自分が大人になって、結婚して、子どもをもうけてもまた戻ってくるという可能性があるのかなという気がします。

○浅見 ありがとうございます。

よろしいですか。

○ナガイケ ほかの市長の方々も何かこんなビジョンがありますとかあれば教えていただきたいんですけども、ちょっと難しいですかね。

○浅見 何かありますでしょうか。

○速水（雲南市長） 子育て世代の保護者の方の働きをいかに実現するかということで、都会ではもう当たり前のことかもしれませんが、私どもの地域では保育所は入所待ち状態、

幼稚園はガラガラということなんですね。これを何とかしなければということで、保育所と幼稚園、それぞれ厚労省と文科省で違いますけれども、現場ではもういいだろうということで、「幼稚園」という認定型で、それは可能ではありますけれども、なかなか建物が別々になってるとやりにくいんですが、保育所と幼稚園が近いところは一つの施設とみなして、幼稚園として保育所も5時まで、あるいは預かり保育をやって7時までというようなことを24年度試行的にやって、25年度は実際に実施に移します。

それから、また、高齢者の方との触れ合いでありますけれども、さっき言いましたように子育て教育について家庭と学校と地域とが一緒になって、学校教育の中で社会教育をしっかり実践していこうということで、教育支援コーディネーターという市の職員が7つの中学校の職員室に1人ずつ入っております。もう一つ社会教育コーディネーターという、これは年配の地域の方がさまざまな体験や知識・技術を教育の現場で子どもたちとの触れ合いの場で伝えていただく、そういった取り組みを行っております。

○浅見 そろそろ時間ですので、それではまとめに入りたいと思います。「地域力の向上」について、一言ずつおっしゃっていただければと思います。

小林市長からお願いいたします。

○小林（都留市長） 先ほど、ちょっと外の視点ということで、山の話をしましたけれども、それに関係してちょっとお願いというんですか、話をさせていただきたいと思います。

人の手の入った二次的自然のことを里地、里山と呼んでいますけれども、現状の中で、先ほどから出ている持続可能な社会をつくっていくという時に、やっぱり里地、里山をどういうふうにしていくかということが日本の大きな課題だと思っていて、そのことをずっと温めていまして、現在、里地、里山、都留市の場合は里水を入れて、「里地里山里水保全活用条例」というのをつくっています。これを6月の議会に出していこうと思っていまして、そのあと10月19日、20日に、今、山梨県で国民文化祭が行われておりまして、その一つの事業として「里地・里山・里水元気フォーラム」というフォーラムを開催することにしていきますので、皆さんからの外の視点も私どもも欲しいですから、ぜひ参加していただいて、お互いの外の視点を語るような場所にしていきたいと思っておりますので、ご参加いただきたいと思います。

それから最後に話すことは、私は先ほど賢い都市、スマートシティの話をした時に、この3つの地域社会像が融合したものって言いましたけれども、これは公式的な話で、自分自身、個人的には、賢いということについて、人間で賢い人というのは、人間はいろいろ才能もあったり個性もあるわけですから、いくら高い能力を持っていたとしてもそのものを出し切って

いない人は、私は賢い人ではないと思っていますよ。たとえ能力が低いのかも知れないが、それでも精いっぱい自分の能力を出し切って生きている人が賢い人だという気持ちを持っていて、そういう意味でそれぞれの市にもいろんな資源があるわけですから、それを最大限に活用すること、このことを常に考えていかなければならず、そのことを頭に入れてまちづくりをしていきたいというように思います。

○浅見 ありがとうございます。

それでは、栗原市長、お願いします。

○栗原（沼津市長） 先ほど南海トラフによる津波の浸水深の話をしていただきました。浸水深がゼロというふうに想定されているにもかかわらず、住民の皆さんが絶対そんなことはない。なぜだと聞いたならば、国の言うことは信じられないと、こう言ったんですね。つまり、市民はわりと行政を信じていないんです。そこは、たぶん日本位汚職とか変なところがありやらしいところがない組織なのに、住民と行政、特に住民が行政に対する信頼感が欠如しているって、これは何なんだろうかと。

一つはマスコミがバンバン悪口を言いますので、それもあるかもしれませんが。あるかもしれませんが、やっぱり僕は住民にも甘えがあると思うんですね。そういう意味では、会話をして、先ほどからお話が出ているように、とにかくお互いに言いたいことを言って、そのコミュニケーションを続けていくということを通じて、地域力を向上させるんだろうかと、そんなふうに考えているところでございます。

○浅見 ありがとうございます。

それでは、速水市長、お願いいたします。

○速水（雲南市長） 地域力の向上というのは、決して他の地域と比べて向上させるということではなくて、自らの地域が昨日よりも今日、今日よりも明日、どう向上していくかということだと思います。したがって、そういう向上を促して、可能にしていくためには、常に個人としては自分に負けない、地域としては自分たちの地域づくりにくじけない、ということが一番求められると思います。自分に負けないという意識が個人、団体に常に必要だと思います。

○浅見 ありがとうございます

それでは、加藤先生、お願いします。

○加藤 まちとしては、時間が刻まれているというか、折り畳まれたという、そういうまちがやっぱり望ましいと思うんです。やっぱりそれは歴史、文化が重層的に積み重なっているということだと思います。

最近流行の漫画家のヤマザキマリという人がおっしゃっていましたが、イタリアの都市は非常に重層的にできている都市で、都市の中でいろいろな人に出会える。そのいろいろな人というのは先人、過去の人にも出会えるということなんですね。やっぱりそういうまちを日本はつくっていかなきゃいけないと思います。

地方の都市も含めて、自然環境も含めて、今までの都市づくりを振り返ると、そういう都市をつくってきたかという、実は疑問に思う面もありますが、そういうまちをつくっていく、そのために地域力というのが発揮されるべきではないかと思っています。その中で、さまざまな人との出会いを体験して、とにかく幸せ、幸福感を味わうことができるという、そういうまちにしていければいいなど、思っております。

○浅見 ありがとうございます。

それでは、北原先生、お願いします。

○北原 僕は最近、場所という言葉と、空間という言葉とをいつも分けて考えるようにしているんですけども、結局空間というのは、スペースは「空っぽの間」と書くわけでして、例えば中心市街地の中には空き店舗や空き家、どんどん空地、出ていく、かつてたくさん皆が集まったところに、そういう空々しい間が増えていくわけです。一方で、震災の影響を受けたところも一気にリセットされて、スペースばかりになっちゃったと、皆の場所が失われてしまったと。

地域力とか復元力というのは、その空間、スペースをどうやって場所に変えていくかというその力だと思うんですね。それをその地域でさまざまな方法論で、結局スペースというのはまだ無機的なものですから、その空間に多様な人々、この場合にはその住民、あるいはさっきからおっしゃっているように行政の人たち、さまざまな人々の思いとアクティビティーが増えていくと、それはきっと場所が変わっていくわけで、まさに震災を受けたところは、早く場所をもう一度戻したいんですね。復元と言っていますけれども、復元力という言葉はちょっと違うなと思うのはもとに戻してはだめなんですよ。

さっき高石市長が、チャンスだっておっしゃいましたけれども、あのままだったらじり貧になるところが、今本当に大変だけれども、今、これを機会に結束して、10年後もう一度、もっと前向きな、10年早く悪くなるころを気づいてやれたんだという思いでやろうと、僕は地域の人たちに言っています。それは、復元というよりは、やっぱりもっと良くしていきたい。それは皆の場所にしたいということなんで、だから、地域力とか復元力というのは空間を場所に変える力だという気がします。

以上です。

○浅見 ありがとうございます。

確かに、空間というのは、「空」という字が入りますので、そういう意味では確かに充実した場所というのが必要ですね。

皆様方から「地域力の向上」についていろいろとご議論いただきました。

地域力とは、その地域のいろいろな資源、これは人もありますし、環境もありますが、そういったものを見つけていくということが重要だというお話がありました。

その中で、「川は遡れ、海を渡れ」とか「風の人、土の人」のように、結局、中から気づく仕掛けと、外から見つけてもらう仕掛け、この両方が必要だという指摘がありました。

見つけるためには、自分たちが理解できるような、あるいはしっかりと議論できる場をつくらねばならない、そういう話もありました。

実際3市の方々が成功しているのは、やはり気づいたものを実際に実践できる場をつくる、ないしはやる気を起こさせるような場をつくる。これはすごくうまく仕掛けたと思います。

後半で議論がございましたが、長期的に「地域力の向上」を考えるには、教育が必要ではないか。もちろん学校教育もあるでしょうが、もう少し広く市民の教育もあると思います。

市民の方々が自分の将来を考える、そういった教育。これは自分たちで自分たちを教育することもありますが、あるいはお互いにお互いを教育するというところもあると思いますが、そういった教育の場を地域でつくっていくということがまさにその「地域力の向上」ということになるという感じがいたしました。

今日はご清聴ありがとうございました。